

主 題：重荷を負い合う神の家族③**聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 6章1－2節****テーマ：兄弟姉妹の罪に対してどのように私たちは応答すべきなのか？**

今朝、見ていきたいのはガラテヤ人への手紙6章のみことばです。ここ2週にわたって私たちは重荷を負い合う神の家族について、また特に兄弟姉妹の間で起きる罪にどのように応答するのか、神様のことばから改めて考えてきました。きょうもその続きを一緒に見ていきたいと思えます。

ただその前に、今回メッセージの準備をしていた時に見つけて、自分自身考えさせられたことばがあったので、先にそれをシェアしたいと思います。このことばはさかのぼること遙か昔、紀元後約2－3世紀ごろに記されたとされる『ディオグネトスへの手紙』と呼ばれる書物の中にあるものです。この手紙を記した著者は、その当時の社会における様子を、実際に見て気づいたクリスチャンとそうでない者との違いをこんなふうを描いていました。「クリスチャンは、国籍、言語、習慣のどれをとっても他の人々と区別がつかない。彼らは独自の都市に住んでいるわけでもなければ、奇妙な方言を話すのでも、風変わりな暮らしを守っているのでもない。彼らの教えは、人の好奇心に触発された空想に基づくものでもない。服装、食事、生活様式全般についても、住んでいる都市がギリシャであろうとそれ以外であろうと、その地の習慣に従っている。それにもかかわらず、彼らの生活には何か特別なものがある。彼らは自分の国に住みながらも、まるで通り過ぎるだけかのように生きている。市民としての役割を果たしながらも、外国人のような不自由さを受けて働いている。あらゆる国が彼らの母国となりうるが、それがどこであろうと、彼らにとっては外国でもある。他の人々と同じように結婚し、子供を持つが、彼らをさらすようなことはしない。肉体の中に生きているが、肉体の欲望に支配されることはない。地上で日々を過ごしているが、天国民である。クリスチャンは全ての人を愛しているが、全ての人々から迫害される。貧しさの中に生きていながら、多くの人々を豊かにし、何も持たずとも、全てを溢れんばかりに持っているのだ。」と。これが当時、このことばを記した著者の目にしていた信仰者たちの姿でした。イエス様が地上を去り、ペテロやパウロといった使徒たちも世を去ってから数百年がたった後、人々は何も自分勝手に生きていたわけではありません。信仰者たちは確かに教えられたみことばを堅く守り、そしてそこに立って忠実に歩み続けようとしていました。この世にあって寄留者として生き、天国民としてのあかしを立て、また何よりも彼らの持っていたまことの愛は、キリストを知らない者との間にはっきりとした違いを生み出していたのです。

あの最後の晩餐の席にあつて、ヨハネ13：34－35で、イエス様もこう言われていました。「:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と。違いを生み出していたものは、愛でした。もちろん同じことが今の私たちにも変わらずに問われています。もし神様の愛を知り、恵みによって救われ、神の家族に召されているのであれば、私たち自身もキリストの弟子として互いに受けた愛でもって愛し合わなければいけません。そしてその愛を示す一つの具体的な実践の形、それこそまさに今私たちが一緒に学んでいる兄弟姉妹との間で起きる罪に対して、私たちが正しく応答することでした。これまでも見てきたように、だれもが兄弟姉妹の罪を正すことができるわけではありません。自分の罪深さを知って、神様の愛と罪赦されたことのすばらしさを知っている御霊の人だけが、柔和な心でもってほかの人の罪を正しく取り扱うことができました。そのようにして救われた者だけがあやまちに陥った同じ神の家族を心からあわれんで、正しい状態へと回復できるようにと、愛をもって手を差し伸べ続けようとするので

す。それこそがパウロの描いていた重荷を負い合う家族の生き方でした。私たちはそんな家族としての生き方、特にパウロがここに挙げていた罪に対する正しい応答の10個ある要素のうち、これまでに五つ見てきました。きょうはその続きの6個目と7個目の要素を見ていきたいと思います。続けて自分自身のこととして、果たして神様が求めておられるそんな歩みを私はしているのだろうか、よく考えてみてください。

では、まず1-5節をお読みしますので、神様のことばをよく見てください。

ガラテヤ6：1-5

「:1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。:2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。:3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。:4 おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。:5 人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」

6. 自分自身に細心の注意を払うこと 1 f 節

では、罪に対する正しい応答六つ目の要素から考えてみましょう。六つ目の要素は、自分自身に細心の注意を払うことです。

▶「自分自身も」

あやまちに陥った兄弟姉妹を目にし、柔和な心でその人を正してあげようとする時、私たちは同時に自分自身が罪を犯さないように気をつけていなければならないというのです。1節はこのように締めくくられていました。「御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい」と。ここで特に目を留めてほしい点が二つあります。一つ目は、パウロがここで「あなたがたは」から「自分自身も」と、主語を複数から単数へと変化させているという点です。パウロはここでまず、ガラテヤの信仰者全体に向かって、「あなたがたは、柔和な心で……正してあげなさい」と命じ、そしてその続きに、あえて「自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい」と口にして、個人個人に目を向けさせていました。言いかえると、誘惑に陥らないように気をつけるのはだれかほかの人、隣の人々の責任ではなく、信仰者それぞれに与えられた務め、あなたや私の責任だったということです。この点に関して、神学者カルヴァンもこんなことばを残していました。「自分自身を顧みなさい。使徒が複数形から単数形へと変えているのは、理由がないわけではありません。使徒は一人一人に語りかけ、自分自身を注意深く見つめるように促すことで、その戒めに重みを持たせているのです。『他者を戒める務めを担っている者は誰であれ、まず己を顧みよ。』」と。

▶「気をつけなさい」

また、もう一つ目を留めてほしいのは、パウロがここで「気をつけなさい」という動詞に、継続を表す現在形を用いているということです。このことばには、もともと「何かに注意を払う」とか「見張る」、「目を光らせる」という意味を持つギリシャ語“スコペオ”が使われています。今“スコペオ”と聞いて、何か頭に思い浮かんだものはないでしょうか？実を言うと、このことばは今も私たちが使っているものの語源になっています。それは、何かを見るための器械、スコープでした。例えば顕微鏡のことを英語ではマイクロスコープと言いますし、望遠鏡のことをテレスコープと言います。私たちは顕微鏡や望遠鏡をどんな時に、何のために使うでしょう？私たちはそれらでもって、何かを注意深く見たり、いろいろなものを丁寧に観察しようとするよさね？肉眼ではふと見逃してしまうような小さなものでも、遠くのものでも、そのようなスコープを用いれば、しっかりとそれに目を留めることができるのです。注意深く見ることができるのです。そしてそれこそまさに、この「気をつけなさい」ということばの表

わしていることでした。何となく頭の片隅に入れておいたらいいよ、ふと気が向いた時だけ心を留めたらいいよという話ではないのです。

例えば同じことばが別の箇所でもこんなふうに訳されていました。ローマ16:17に「兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。」とありました。この「警戒してください」ということばが、同じ気をつけなさいということばでした。要するに、パウロはここで信仰者ひとりひとりが細心の注意を、最大限の警戒を自分の心に払い続けているようにと訴えていたのです。あやまちに陥った兄弟姉妹を正そうとする時、自分も同じ弱さを抱えている罪人であることを忘れて、自分が誘惑や罪に陥ってしまうことのないように、自分自身をいつも見張って、注意深く警戒を払っていなさいと求められていたのです。そしてこれは、非常に重要なことでした。というのも、私たちは実際にあやまちに陥ったような者やつまずいた者、罪を犯した者を正そうとする時、さまざまな罪の誘惑や危険にさらされることになるからです。

よく考えてみてください。実際、どんな罪の誘惑を受けることになるでしょう？ある人にとって、それは怒りや憤りかもしれません。罪を犯した者、特に自分に対して罪を犯し、痛みをもたらしたような人の罪を扱おうとするのであれば、柔和な心をいっさい示さず不平不満をあらわにして、和解ではなくさらなる争いをもたらすことになるかもしれません。最初はただ助けたいと願ってその人のところに行って、愛をもって罪を戒めても、その人が一向に聞き入れようとしなければ、いやむしろ怒りを示してくるようであれば、苦い思いをうちに抱いて、冷たい態度を取ったとしても仕方ないよねと、自分に言い聞かせ始めるかもしれません。またある人にとってそれは、プライドや高慢さかもしれません。罪を犯した人を目の当たりにする時、自分ならこんな罪にはつまずかないのにとか、どうしてこんな愚かなあやまちに陥るのか、私は信じられませんが、自分勝手なプライドや高ぶった思いを心のうちに膨らませているようなこともあるかもしれません。最初はただあわれみの心をもって、どんな助けでも与えたいとへりくだっていたとしても、相手がいつまでも同じことを頑なに繰り返して続ければ、次第に自分の基準や思いを押しつけるようになり、もう忍耐を示す必要はないですよと、諦めるかもしれません。また加えてある人にとって、それは正してあげようとしている相手が陥っている同じ罪かもしれません。ゴシップや陰口、ねたみや嫉妬、性的な罪。たとえそれがどんな罪であったとしても、ほかの人の罪深さと向き合い続けていけば、本来、落ちた穴から引き上げようとしていたはずなのに、いつの間にか同じ穴に落ちてしまうような危険性も存在しているのです。

どうでしょう？改めて自分自身の歩みを振り返ってみて、これまでに罪の誘惑に陥ってしまったことがどれほどあったでしょう？だれかの罪を見るような時、兄弟姉妹の罪を扱うような時、怒りや不満に支配されていたり、プライドにあふれていて、自分の罪を小さく見て、相手の罪を大きく扱うようなことがどれほどあったでしょう？自分の罪を小さく扱い続けるからこそ、自分の罪深さを忘れて、あわれみをいっさい示そうともせず、ただ相手の問題に非難だけしたこと、心の中で冷たい思いを抱き続けたことがいったいどれほどあるでしょう？間違いなく、私たちはみなこのような弱さをさまざまに抱えています。だからみことばは、だれかの罪と向き合う際は、まず何よりも自分が誘惑に陥らないように、自分の心に細心の注意を払っていなさいとはっきりと警告していたのです。これが私たちに何を教えてくれているかということ、注意を払ってなければ落ちてしまうということです。イエス様も同じようなことを口にされていました。マタイ7:3-5に「:3 また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。:4 兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。:5 偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。」と記されていました。気づいてほしいのは、イエス様はここで、何も兄弟の罪を見て見ぬふりをしたらいいですよという話をしていたのでもなければ、それぞれが自分自身の問題で手いっぱいだから、

ほかの人には何もしなくていいですよという話をしていたのでもありません。そうではなく、イエス様は正しい順番を明らかにしていました。まずは自分自身から始まり、それからほかの兄弟姉妹の罪を取り除いてあげようとするということです。

そしてこの時、絶対に欠かせないことがあります。それは自分の持っている罪がより大きな梁で、ほかの兄弟の罪が小さなちりであるという、みことばの教えている正しい視点をいつも覚えていることです。イエス様はここであえて具体的な罪を挙げていませんでした。このような罪が梁に該当し、このような罪がちりに該当しますということはいっさい口にしていませんでした。イエス様が言っていたことは、自分の罪は梁であって、相手の罪はちりだということです。でも残念ながら多くの場面であって、私たちはこの点を忘れてふるまってしまうことがあります。自分の問題よりも、相手の問題の方がより大きな問題なのだと、私たちは当たり前のように考えています。また、確かに相手の犯した罪の方がより深刻な影響をもたらす場面も多々あるでしょう。でも、そんな時こそ思い出さないといけません。私たちはいったいだれの基準に立っているのかということです。そして、もし私たちがみことばの基準、イエス様のことばに立っているのであれば、聖なる完全な神様の前には、どんな罪も罪だということです。だからこそ、どのような罪であったとしても、まず、私たちは自分自身の大きな罪と向き合い、その責任を取る必要がありました。

たとえ仮に99%相手が悪いような場面に思えたとしても、私たちはその1%の梁を自分のうちから取りのけることをイエス様から求められているということです。そしてそうやって自分自身の罪深さを正しく認めて、悔い改め、自分の梁を取り除いた者が、あやまちに陥って苦しんでいる兄弟姉妹のちりから柔和な心をもって助けてあげることができるのです。大切なのは、私たちがどのように罪を考えるかではありません。私たちがみことばに立って、イエス様の基準に立って、自分の罪深さを認めてへりくだって、まず自分のことに向き合うことです。まず、自分が誘惑に陥らないようにと、自分の心に細心の注意を払い続けることです。神学者のひとり、トーマス・シュレイナーという人物も、この点に関してこのようなことばを残していました。「他の人が罪を犯したからといって、その罪をやり玉に挙げて、挑発したり、落胆させたりするわけではありません。罪に陥った者を回復させる人は、自分の過ちや罪への陥りやすさを覚えているからこそ、謙虚であり続けます。自分自身も誘惑を受け、それに負けるかもしれないと認めているのです。今日、罪を犯した者を回復させたとしても、明日には自分が回復させられる必要があるかもしれません。自分自身の過ちを認識することで、信仰者は勝利主義や傲慢さを避けることができるのです。」と述べています。私たちがほかの兄弟姉妹の罪を扱う時、私たちが自分の妻や夫、子どもたちや親、どのような人であろうとも、だれかの罪を取り扱う時、私たちの目は先にどこを向いているでしょう？兄弟姉妹の罪を正そうとする時、みことばは自分自身に細心の注意を払うことを教えていました。それが罪に対して、私たちがとるべき六つ目の正しい応答だったのです。

7. ひとりでは抱えきれない重荷を負い合うこと 2節

次に、罪に対する正しい応答の七つ目の要素は、ひとりでは抱えきれない重荷を負い合うことです。兄弟姉妹の抱えている重荷を放置するわけではありません。それに押しつぶされそうになっているのをただ眺めているのでもありません。私たちはお互いに肩を貸し合い、一緒になって重荷を運んでいこうとするのです。もう一度みことばをよく見ると、2節に「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい」と述べていました。ここで鍵となる「互いの重荷を負い合い」ということばが出てきました。そしてこのことばを通して、パウロは少なくとも二つの重要な事実を私たちに教えてくれました。

1) 重荷は現実の問題として存在する

一つは、重荷は現実の問題として存在するということです。信仰者はだれであれ、この地上での歩みにおいて重荷を覚えることがあります。心をひどく思い悩ませるような問題をみんな経験します。その

重荷自体は、人それぞれ異なっているでしょう。時々頭を悩ませるような比較的小さな問題が降りかかることもあれば、心がそれだけに支配されてしまって、いつまでも気が重くなって、出口が見えないと嘆くような大きな問題が起こることもあるかもしれません。それがどのようなものであれ、私たちはみなこの世での信仰生活にあって、数え切れないほどの重荷を味わうのです。ここで使われていた「重荷」ということばには、もともと持ち上げたり運んだりするのが困難な、非常に重たい荷物を表す意味が含まれています。少し想像してみてください。ある人がたくさんの物を詰め込んだカバンを何とか持ち上げて、背負って歩き出したのはいいものの、その重さですぐに肩や関節、腕が痛くなってきて、息苦しくなっている様子。自分にのしかかる余りの重さに、それがもたらす痛みや苦しみによって、このまま自分が背負ったままではいられません、耐えられませんか。それがここで言われている「重荷」というものでした。

また、これと同じことばは、聖書の別の箇所でも用いられていて、そこでは極めて過酷な仕事や作業を表していました。マタイ20：12に「……私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。」と書いています。ここで出てきていた「労苦」ということばが「重荷」と同じものが使われていました。ですからこの重荷というのは、からだだけではありません。感情や精神的にも打ちのめされてしまうような、ひとりでは耐えられないほどのきつくのしかかる労苦、困難、苦しみといったものを表していました。パウロはそんな重荷が、すべての信仰者の歩みに存在していることをよくわかっていました。だからこそ、互いの重荷を負い合いなさいと、はっきりと命じていたのです。

より具体的に言うのであれば、この重荷とはいったい何のことを指しているのかと思う人がいるかもしれません。確かにこの箇所を見ると、パウロは具体的な例を挙げていませんでした。パウロはただ互いに重荷を負い合いなさいと言いました。それゆえ多くの聖書注解者たちは、このことばをより広い意味でとらえることができると考えています。その考えももちろん何も間違っていないでしょう。信仰者の歩みにおいて、思い悩ませるような、苦しめるような困難は、文字どおり数多くあるのです。みことばも言っています。私たちはさまざまな試練を経験することがあります。健康面において問題を抱えることもあれば、財政面や仕事面において難しさを抱えることもあるでしょう。家族や友人などとの関係において痛みを伴うこともあれば、信仰に立ち続けるがゆえにいろいろな戦いや迫害を受けることもあります。形や大きさ、頻度は人それぞれでしょう。でも、私たちはみな深い悲しみや失意を抱かせられるような、どうしようもなく心が重たくなってしまふような困難に直面することがあります。ですから、そのような広い意味でも考えることはできます。

それと同時に、私たちの歩みには決して避けることのできない、ある一つの大きな困難があります。それは、私たちが陥ってしまう誘惑です。私たちが日々経験する罪との戦い、罪との葛藤です。私たちは日々罪との葛藤を覚えるからこそ、これまでに数え切れないぐらい思ったことないですか？罪との戦いを経験しなくなれば、どんなに楽だろうか、どんなにすばらしいだろうかと。誘惑に陥ることがなくて、神様に喜ばれることだけをどんな時もずっと選択し続けることができたなら、どんなにうれしいだろうかと。どんなにそれを強く願ったとしても、残念ながらこの世で罪の性質を私たちが持っている限り、誘惑に負けてしまうことがあり、罪に敗北してしまうことがあり、神様を悲しませることがあるのです。神様の前に、心から悔い改めて、喜ばれることだけをしていこうと決心したとしても、次の瞬間には、思いがけないあやまちに陥っていることもあります。自分が罪を犯したその結果、神様だけではなく、周りの人との関係を傷つけてしまい、それによって苦しみを伴うこともあります。愛する神様が愛されることだけをしていきたいと願っても、それとは真反対のことをしてしまう自分に悲しみを覚えて、罪深さに心が暗くなり、罪のもたらすさまざまな結果に心が押しつぶされそうになるのです。さまざまな重荷は現実の問題として存在しています。罪との戦いは現実のものとして存在しています。実際、今、皆さんの中にもきつくのしかかる何らかの困難や苦しみによって喜びや平安を失っている人もいるかも

しれません。そして、もしそんな重荷を味わっているのであれば、一つ覚えておいてください。神様はそんなあなたが抱えている苦しみを知らないわけではありません。私たちの弱さや愚かさも含めてすべてをご存じでいてくださり、それでいてなお神様は助けを与えてくださるお方です。私たちが心から悔い改めるのであれば、罪の赦しを与えてくださり、さまざまな思い煩いや重荷を、私たちはこの方にゆだねることができます。かつてペテロもはっきりと言っていました。Ⅰペテロ5：7に「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」と言っていました。こうしてどんな時も信仰者は恵み深い神様に祈りをささげることができ、必要なあわれみと必要な助けを私たちは求めることができるのです。

2) 重荷は互いに負い合うことができる

でも同時に、同じこの神様が私たちのその重荷を取り除くための別の手段を与えてくださっていました。それが重荷を負い合うことのできる兄弟姉妹、神の家族の存在だということです。それが二つ目の重要な事実として、パウロがここに教えてくれていたことでした。ひとりでは抱えきれないような重荷も、私たちは互いに負い合うことができるということです。

▶「負い合う」

ここで使われていた「負い合」うということばにはもともと「運ぶ」とか「支える」、「耐え忍ぶ」といった意味が含まれています。つまり、兄弟姉妹は、自分ひとりで重荷を運んで行くではありません。そもそも自分ひとりでは運べないのです。自分ひとりで誘惑や罪との戦いを続けていくではありません。そうではなく、私たちは互いに支え合い、重荷を分け合いながらともに耐え忍ぶことができるということです。もちろん私たちのすべての助けや必要は、神様からやって来ます。でもその神様にいつも目を留め続けるようにと、思い出させ続けてくれる兄弟姉妹が欠かせないのです。というのも、重荷が降りかかってくるような時、心がどんどん重くなっていくような時、私たちはどんな態度に陥ってしまいがちでしょうか？自分自身の受ける苦しみや痛みが思いが支配され始めて、神様から目をそらし、そして自分のことにのみとらわれ始めてしまうことがあるかもしれません。キリストのうちに助けや希望を見出すのではなく、自分の置かれている状況に不満や不平を覚え続け、何か別のものに解決を求めて、さらに罪に罪を重ねているかもしれません。本来であれば、ただ神様の方に帰るべきなのに、私たちはそうやって神様のことを忘れてしまい、重荷に押しつぶされて、どうしようもない失意や悲しみを抱くことがあります。だからこそ、神様はそんな私たちに重荷を負い合うことのできる兄弟姉妹を与えてくださいました。いろいろな方向を見てしまいがちで、いろいろな物によって押しつぶされやすい私たちが耐え忍ぶことができるように、神様は私たちに神の家族を与えてくださっているのです。互いに祈り合って、慰め合うことのできる、互いに正しい道からそれないように励まし合うことのできる、お互いにみことばの知恵をもって、キリストに目を向け続けさせるようにと教え合うことのできる教会を、神の家族を与えてくださっているのです。かつてパウロもすべての信仰者が一つのキリストのからだとして生きていくことができる喜びを、こんなふうに表現していました。Ⅰコリント12：25－26に「:25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。:26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」と。これが、私たちの今の姿でした。私たちキリストのからだの一つに属している者は、一つの部分が苦しめば同じように苦しみ、一つの部分が尊ばればともに喜ぼうとするのです。

でも果たして、実際の歩みはどうでしょう？私たちは、こうして私たちが神の家族として生きていることを何度も何度も聞いています。私たちが一つのからだとして生かされていることも、繰り返し耳にしています。それでも、信仰生活をたったひとりで歩むことができるものだと考えている人もいます。耐えられないほどの重荷をひとりで背負っていくことはできないと、みことばははっきりと示しているにもかかわらず、自分だけでそれを背負っても問題がないかのように思い込んでいる人もいます。口で

はそうは言わないかもしれませんが。でも心でそのように考えているからこそ、ほかの兄弟姉妹に深くかかわろうとしなかったり、逆に自分の歩みを巧みに隠して、だれにも分かち合おうとしなかったりするのです。重荷を分かち合うことが私たちの歩みはずなのに、それを拒むことがあるのです。どうでしょう？私たち自身、もし兄弟姉妹が大きな重荷を背負っていて、よろめいているのを見るのであれば、喜んでその荷と一緒に背負って支えていこうとするのでしょうか？罪やあやまちに陥って苦しんでいる家族の一員を目にするのであれば、その人を非難するのではなく、互いに助けの手を差し伸べようとするのでしょうか？自分自身がだれかに重荷を背負ってもらわないと歩んでいくことができないと素直に認めて、ほかの兄弟姉妹を自分の生活のうちに入れていましょうか？間違いなく言えるのは、だれかの重荷を背負うということには、大きな犠牲や難しさが必ず伴うということ、私たちはよく知っています。だから私たちはそのことを敬遠することがあります。容易ではありません。だれかの困難と向き合っている間、自分自身の上にさらに大きな難しさが降ってこないとは限らないのです。私たち自身の歩みうちにも、絶えずいろいろな痛みや苦しみが存在しているのです。そしてそのような中であって、私たちが手を差し伸べて、重荷を負い合っていこうとすれば、確かにそれは大きな犠牲を伴うのです。もし私たちが自分のことをいつもすべての中心に置いているのであれば、互いの重荷を負い合うことなど絶対にしようとしません。

だからこそ、2節の後半に記されていることばをよく覚えていることが大切でした。そこには「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい」とありました。これは、いったい何を言わんとしていたのでしょうか？簡潔に言うのであれば、私たちが互いの重荷を負い合うその時こそ、キリストの示した愛の基準と模範というものを最も明らかにすることになるということです。なぜなら、イエス様はいったい何をしてくださったのでしょうか？だれでもないイエス様こそ父なる神様を愛し、その大きな愛のゆえに私たちの罪のすべてを背負って十字架にかかってくださいました。本来であれば、頑なに神様に逆らい続けている私たち自身が受けるべき罪の罰を、負うべきその罪の重荷を、主はみずから進んでその身に背負ってくださり、命をささげてご自身の愛を示してくださいました。私たちはただこのイエス・キリストの犠牲とそのみわざを信じ受け入れて、恵みによって救われただけの者です。しかし、そんな私たちが、自分が受けた愛でもって互いに愛し合おうとするのであれば、キリストが愛してくださいましたように、互いに重荷を負い合いながら歩んでいこうとするのであれば、それこそイエス・キリストの姿にならう弟子としてのあかしになると言うのです。

確かに見たように、重荷は現実の問題として存在しています。自分ひとりではそもそも背負うこともできない、どうしようもない重たい試練や困難や難しさは日々あふれています。それらによって押しつぶされそうになることもあるでしょう。でも、感謝なことに、私たちのすべてをご存じでいてくださるあわれみ深い神様は、必要な時に助けを与えてくださるだけではありません。この神様は、何よりひとりでは耐えることのできない重荷をともに負い合うことのできる兄弟姉妹を私たちに与えてくださいました。自分ひとりでは容易に誘惑に陥ってしまって、神様から目を離し、あやまちに陥ってしまうこともある、そんな弱い私たちは、ただひとりで信仰生活を歩んで行こうとするものではありません。それは神様がもともと持っていたご計画ではありません。私たちは、互いに正しい道へと戻ることができるようにと励まし、時に正し合い、重荷を担い合うことのできる神の家族と、この地上であって、戦いや葛藤をともに歩んでいくことができるということです。それが、私たちが神の家族として生きていることのすばらしい特権でした。

私たちは、確かにいろいろな難しさを覚えます。でも、私たちはいつもそれを神様のもとに持って行くことができるだけではありません。皆さんの隣に座っている兄弟姉妹と重荷を負って歩んでいくことができるのです。ともに祈り合うことができ、ともに支え合うことができ、ともに励まし合うことができると言うのです。ひとりではない、そうみことばの真理を覚える時に、私たちはそれによって安心や

慰めを見出すことができます。私たちの歩みは孤独なものではありませんでした。同じ神様を愛し、同じキリストにあって一つとされた神の家族と一緒に、ひとりでは抱え切ることのできない重荷を負い合いながら歩いていくことができる。それこそが罪に陥って苦しんでいる兄弟姉妹を見る時に、私たちがとるべきふさわしい愛の応答でした。

皆さん、感謝なことに今週も始まりました。恵みによって私たちは日々を生かされています。そして、今週生かされているのであれば、その中において、さまざまなことが待っているでしょう。難しさも待っているでしょう。でも、神様が与えてくださった重荷を負い合うことのできる兄弟姉妹がいます。支え合うことのできる神の家族がいます。だとすれば、そんなすばらしいものを与えてくださった神様を覚えて、そのことに感謝しながら、みことばをともに実践して行きましょう。私たちの愛する主をともにほめたたえる者として、今週もともに歩いて行きましょう。